招月亭の宴

赤堀芳男

猛暑が去って、夏の終わりのようなものを感じると、それからすぐに「秋の夜長」が始まる。
折々の季節の花を愛で、吹く風の小さな音の変化を堪能し、心許す友と酒を酌み交わすのは何とも言えない風情がある。
秋風は冷える。ましてや、心を溶かしてしまうような月光の下にいるのだから尚更だ。蒼く暗い夜空に煌々としている月があるのだから、馬蹄大納言の邸宅の中に造られた『招月亭』も名前どおりの風雅さを保っている。
馬蹄大納言と酒を酌み交わしているのは、友は類を呼ぶという言葉どおり、どことなく雰囲気の似ている花丸煌々斎である。二人は貴族であっても御所流の武芸をたしなむでもなく、蹴鞠に熱中するわけでもない。要するに運動が苦手である。だからと言って、和歌を詠むことや、舞楽や琵琶を弾くことも好きではない。教養を磨くことも、やりたい人がやればよいという思考の持ち主で、何事に至っても寛容なのである。要するに、二人は勉強も運動も苦手なのだが、決してそれを口にしない。
そのためなのかは分からないが、連日の宴席における深酒と暴食が災いして、齢五十にして腹がどっぷりと突き出てきた。それは前から見るよりも、横から見る方が腹の肉幅が厚く、公卿としての威厳を保つにはもってこいの体躯になっている。勿論、恰幅の良い体であるが、御所内での動きは早い。
当然、御所の中では派閥がある。昔も今も、藤原家の宮廷政治であっても、派閥はある。その派閥に、二人はなるべく近づかないように心掛けている。
それでも仲の悪い貴族たちは、馬蹄大納言と花丸煌々斎のことを指して、「福々しい二人組」とか「恰幅の良い相棒」とか言っている。しかし、実際に二人に面と向かって言える者はいなかった。
唯一、体躯のことを言えるのは、馬蹄大納言には花丸煌々斎であり、煌々斎には大納言であった。二人は気があって、お互い様というところである。二人は仲良しで、身分を越えたところで気を許している。お互いに同様の体躯を誇っている故に、健康に気をつけるという意味で、体のことを話題にする。二人はそれが自然であると思っている。
しかし、心の中で考えていることは、お互いに同じであった。馬蹄大納言は常々、花丸煌々斎に対して「太ってきたなぁ」と思っている。花丸煌々斎は馬蹄大納言に対しては、「少々、福々しくなった」と感じている。
けれども、馬蹄大納言家に仕えている家臣は、そうは思っていない。むしろ、ぽちゃぽちゃしている豊潤な体躯は、馬蹄大納言家が裕福であるという証拠であると考えている。だから、友人である花丸煌々斎の家も、大納言家ほどではないにしろ、相当に裕福であろうと推察している。二人は貴族の誇りであると。
このように家臣というものは忠実であり、主人のためなら、そのように善意をもって信じていられる。
もっとも、主人と家臣は一心同体であり、運命を共同に背負っていく。家臣とは誠意をもって

尽くしてくれる実にありがたい存在であり、日本古来の仁の道を歩んで、信頼と誠実を実践する忠義の心である。

　或る時、馬蹄大納言が思い立った。
「さて花丸殿、今年の中秋の名月は、気の合う仲間たちと一緒に観賞しようではないか」
　花丸煌々斎は、はたと膝を叩いて賛成する。
「それは良い考えであります。流石は大納言様。近頃は不景気や物価上昇だという声ばかり。金がないから金に走る、味気のない話でもちきりです。公卿たちがこうであっては、世の中をますます暗くするばかりでございます。もうすぐ、十五夜でございます。月見の宴は、その折りでよろしいでしょうか」
「それが良い。次の十三夜も考えておこう」
「はい。何か余興を考えてみるのが宜しいかと。早速、手配をいたします」
　そうして、名月を観賞する宴は開催されることとなる。中秋の名月である十五夜と、後の月の十三夜と続き、招月亭では事あるごとに理由をつけて、名月を観賞する宴が開かれていく。
　その誘いに集ったのは幾多の殿中人であるが、彼らはいずれも名月の観賞よりも、馬蹄大納言の覚えを良くするために集まった。
　宮中においては、大納言は大納言の格式をもつ。どんな強力な派閥に入ろうが、大納言の言葉なくしては如何ともしがたい。ましてや、馬蹄大納言は頭脳明晰であり、天皇の信頼が厚かった。
　と同時に、馬蹄大納言は恐れられてもいる。馬蹄大納言は、要するに頭が冴えているのだ。だから大納言にまで上りつめたとも言えるのだが、これまでに貴族とは思えぬ、否、とても貴族らしい数々の権謀術数を繰りだしていた。
　貴族たちは、その権謀術数がどのようなものかは計り知れないが、結果を見て恐れ慄いていた。いつも結果が、馬蹄大納言に有利な終結をしていた。
　貴族たちは、その結果を体験していたからこそ、馬蹄大納言の罠といおうか、網といおうか、それに掛からぬためにも覚えを良くしておくことが最善であると認識していた。
　それには少なくとも此処、馬蹄大納言の招月亭に集っている限りにおいては、敵となる心配がないだろうとの安心感が持てた。
　馬蹄大納言は、御所においても隣の紫微御所においても、必要な言葉を発するが無駄な口はきかない。そのために公卿の間では、頭脳明晰の評価は勿論であるが、人望にも長けている。普段から公卿というものは、強者の餌食にならないように、常に心がけていなければならない。武力をもたない代わりに、それが才覚というものだ。特に宮中では、才覚が必要だ。「謀」は貴族の特権である。

　十五夜の観月については花丸煌々斎の尽力もあり、大勢の公卿が集まったので、大納言は機嫌が良かった。招月亭の宴席においての並び順も、公家の家格の順位によって並ぶので、御所での並びとなるのが慣例である。
　しかし、事前に「今日は交流の場として、自由に楽しまれるが良かろう」との大納言の意向によって、気心の合う公卿同士が固まって座っていた。
　いつの時代であっても、役職や地位を超越して、気の合う友人がいるものだ。だから、私的な集まりは自由である方が、話が弾んで座が楽しくなる。それがお互いに良いのだと、馬蹄大納言は考えて実行している。
　もう一つの意味がある。私はこのように心が広く懐が深いのだと馬蹄大納言は悦に浸っているが、その理由はこうすることによって、二人の女性が馬蹄大納言の隣に堂々と座っていられた。
　右に座っているのが胡蝶夫人であり、左に座っているのが魚貝夫人である。二人はともに、夫人と言われるように夫がいる。けれども、夫の出世のために馬蹄大納言家の月見の宴を良い機会だと捉えて、何とか媚を売ろうとしている。夫への言い訳はそのように申し開いてある。しかし、実際は二人とも自宅に籠っている性格ではなく、こういう場所が好きであった。
　馬蹄大納言も五十歳を過ぎて、「後は僅かな人生だ」という境地にいるので、短い時間ながら招月亭での酒宴を楽しもうと考えている。賑やかな時間は楽しいものだ。
　周りにいるのは、華やかで若い女御で良い。けれども話し相手には同時代を過ごしてきた、これまでにも手腕をふるってきた女狐のような、老獪さをもっている二人の婦人も悪くはない。人生の良いも悪いも、酸っぱいも甘いも知っているのに、初心なふりをしているのも結構面白かった。
「秋風が寒いから」などと言って、上手に大納言の横に座ってくる手腕は、見事なものだ。若い女御は手玉に取られてしまっている。
　大納言は、秋風が寒いのは年齢のせいであり、誰も寒いとは感じていないと思ったが、口にすると恐ろしいので黙っていた。両夫人に右側と左側から挟まれているのも、良いではないかと考えることにした。まぁ、近くには緋鯉姫と緋めだか姫もいるのだから、真横を見なければ「若さが見える」と考えていた。
　そのように自分を納得させてから一呼吸おくと、馬蹄大納言は何となく面白くなって、つい微笑んでしまった。
　皆から見ると、離れて見てみると、豪奢な衣服に身を包んだ女性たちに囲まれて、艶やかな世界にみえているのであろうとも考えた。
　実際に話をしていると、両夫人には若々しさとか瑞々しさが感じられない分だけ、しっとりとしておっとりとした不動の落ち着きがあった。それが、居心地の良さを誇っているのかもしれない。
　そうこうするうちに、池の横に拵えられた舞台において雅楽が始まった。花丸煌々斎が「月の

輝きが一番増した時に、演奏を始めるのが良い」と考えて、合図した模様である。
　音曲の調べと共に、優雅な一夜が過ぎている。公卿たちも、女御たちも満足している。

　このような演出のできる花丸煌々斎は、只者ではない。馬蹄大納言は、花丸煌々斎が尋常の人間ではないことを知っていた。
　実は、この招月亭にある池の精霊である。池の鏡の精であって、月光から生まれた妖精である。この「ふくよかな男が」である。誰だって信じない。信じられない不思議な話である。
　妖精はもっと可愛くて、きれいで愛らしいものだとの先入観をもってはいけない。それは思い込みという錯覚である。
　そうであろう。招月亭の池を鏡のように照らしている月光が、花丸煌々斎の命の糧である。水面に鏡のような池があればこそ、毎晩のように此処に現れて、馬蹄大納言の酒宴の相手ができる。そうして、二人は気の合った友人でいられる。

　大変だ。俄かに風が吹き始めている。こともあろうに、十五夜の観月の夜だというのに。
　その風が湿気を含んでいることを、いち早く察することができるのも、花丸煌々斎なのである。それ故に、雅楽の演奏を急がせた。
　満天の星の下で、蒼い月光も射している。雅楽の演奏が澄んだ音色を、まるで空中に棚引くように広げていく。誰しも、この世のものとは思えない美しい光景に浸っている。生きることを楽しみ、愛を慈しんでいる。眩いばかりの星空の下で、男女の出会いも生まれようとしている。
　その夜が唐突に壊れようとしている。

　花丸煌々斎は、同じく池の中から魚貝夫人が現出していたのを知っていた。それは、馬蹄大納言のたっての希望であった。魚の化身である魚貝夫人がお出ましになっているのだから、水という命の糧となる雨を呼ばない方がおかしい。
　煌々斎にしてみれば苦々しい限りだが、どうして馬蹄大納言がこの女に執着しているのか、理解できない。出来れば今日だけは、遠慮してほしかった。いや、今日といわず観月の宴の時には、参加してほしくないのが本音だ。
　魚貝夫人はお多福顔である。今の時代、最も人気のある流行の顔立ちである。なにしろ、この顔が一番もてる。
　しかし、顔立ちはともかく、魚貝夫人は病的なほどに目が飛びでて大きく、鼻は低く胡坐をかいている。要するに鼻がでかい。口は裂けるほどに大きく、唇も厚い。一口で言うと、やっぱり魚の化身から抜け出せない、お多福顔なのだ。

魚貝夫人は長命の魚が化身した姿なので、笑うと妖怪のような奇々怪々な表情をする。そのために、人間を驚かす時にはちょうど良いのだが、馬蹄大納言の横に座ってすましている時には、本性を隠しているようで気色が悪い。

煌々斎が「どうして大納言は気にいっているのだろうか」と考えた場合に、思いつくのは彼女の肌色が、他の女性に比べて抜けるように白かったためではないのかと推察している。

白い肌の理由は簡単で、晴れた日の昼間は池の底に眠っているからであるが、大納言は彼女の美しさである色白美人は、天性のものであると信じ込んでいる。今の大納言は恋に恋して、夢中になっているのと同じ状況だから、それについて何も言わない方が無難である。

だから、今宵の招月亭の観月の会も、やはり途中から群雲が湧いてきてしまう。名月も全体が雲に隠れては、なすすべもない。これもすべて、池に暮らしている老魚の精霊である魚貝夫人によってもたらされたものであり、結果として秋雨が降ってくるのも仕方がない。突然の雨による慌ただしさも、酒席の一興だと受け止めて、楽しむのが肝要だ。

ただし、花丸煌々斎は違う。月光の反射で、鏡のような池になっていなければ、能力が発揮できない。そういう意味では、二人は池に暮らす精霊としては、競争相手なのだ。

それにしても魚貝夫人は、雨を呼ぶくらいに興奮している。いわゆる、水を得た魚のように喜んでいる。此処にいるみんなが、「今日の大納言様は、魚貝夫人ばかりに声をかけている」と感じていた。

それで公卿たちは、一方の夫人にばかり贔屓をしてはならないと思っても、大納言に進言はできなかった。公卿たちが心配しているのは、二人の夫人がともに実力者であるために、後々の憂いを心配したのである。片方だけの機嫌をとれば、御所に必ず激震が走ると。

しかし、自然の流れに任せてみようと思えば、大納言がどちらの夫人を気にいっても構わないのである。誰も手をだせないし、傷つきもしなかった。馬蹄大納言が、魚貝夫人に声をかけているならば、煌々斎は一人で酒を飲んでいる。必然的に魚貝夫人が嬉々としていれば雨を呼ぶだろうから、一、二の三で池の中に帰っていく。

どちらかと言えば、花丸煌々斎は招月亭の庭を棲家にして、その空中を飛翔している胡蝶夫人に好感をもっている。名前のとおり胡蝶夫人は、蝶々の精霊であり、黄色い揚羽蝶の化身である。そのために晴れた空、晴れた夕空、晴れた日に夜の帳が静かに下りるのが好きである。この点でも、煌々斎と同じ環境を求めていた。これまでは遠慮していたこともあり、距離をおいて接していたせいもあるので、二人はそれほどに親密ではなかった。けれども煌々斎は、胡蝶夫人の悪口を耳にしたことがなかった。

反対に魚貝夫人に対しての印象は、悪すぎるくらいに悪い。池の中でも、暇があれば誰かの悪口を言っていた。内容は、他人の噂話をすることで生活しているような性格であり、彼女の口から褒め言葉がでるところを見たことがなかった。

そのように口が軽いために、友人らしい友人は皆無である。しかし初対面であっても、昔からの親友のごとくに振るまえるのは一つの特技で、つい気を許してしまう。この演技力はすごい。

でも結局のところは、誰からも相手にされていない。それが、久し振りに馬蹄大納言の宴席に招かれ、覚えめでたきになった。それは魚貝夫人が、馬蹄大納言を前にして、季節の移り変わる様子に心を痛める乙女のように振るまったからである。大納言は気に入った。
　実際、冬になって心細い思いをする魚たちにとって、池に張る氷は大の苦手である。
　その心細さを、乙女の持つ純粋さのように表現したのだ。二百二十歳という年齢には、繊細さは似つかないと思いながらも。
　その結果、大納言が、「可愛い夫人よのぉ、魚貝夫人は」と言った。そして、魚貝夫人との会話を、とても愉快に楽しんでいる大納言の様子を見た時に、周囲の者は唖然とするばかりであった。
　だから「邪魔をしないことが一番賢明である」と、誰もが悟っていた。ましてや「池の中の評判は最悪である」とは、口が裂けても言えない。
　今日は、魚貝夫人の妖力が誰よりも勝っており、雲を呼び秋雨を降らすという離れ業をみせていただいた。それ故に、池の中に戻った花丸煌々斎は、逆に心が落ち着いている。泰然自若の心境だ。とても面白いと受け流すしかない。
　池の中の魚貝夫人の姿と重ね、人間世界において、特に大納言の前での魚貝夫人の変貌ぶりを堪能した。その姿は演戯をみるように面白く、それは、魚はこのように変身することができるという、可能性に挑戦する姿であった。此処のところは、偉いと思う。誰が何と言っても偉い。
　魚貝夫人は、いつでも全力疾走している。この生き方は花丸煌々斎のように、人生を達観して冷めたような生き方をしているのとは、明らかに違う。良く言えば煌々斎は、物事を冷静に見つめている。しかし、見つめているだけが主体となっていた。これは何になるのだろう。
　魚貝夫人について語れば、もう少し悪口雑言を控えれば良いのになぁ、ということくらいだ。
　これまでに数々の「もののけ」たちが、虚言によって迷惑を被っている。本当にないことづくしを、本当にあったように構築するのだから、その能力は高く買われて良いはずだ。小説家とか、劇作家とかの創作的なことをやらせてみれば、際立つ才能を発揮するだろう。
　もののけ仲間の一人として、魚貝夫人の雨降らしの妖力とは別に、この嘘つき能力、違った元へ、架空世界創造能力もまた評価されてしかるべきだ。そうすれば馬蹄大納言の力を借りなくても、一人で堂々と生きられるはずだ。
　もしそうなれば、池の中に君臨する一喝坊のようにたくさんのもののけから尊敬され、同時に畏怖されて、威厳をもって独自の存在として崇められるはずである。何も好き好んで、怪魚が池の中から飛翔していく必要はないと、花丸煌々斎は思った。しかし、自分自身を考えてみれば、池の外の世界が喜怒哀楽や煩わしさにあふれていて、とっても楽しいものだった。この味を一度覚えたら止められない。

　天空界にいる胡蝶夫人を相手に、人間であり貴族社会にしか生きたことのない馬蹄大納言の取り合いを、真剣に行わなくても良いのではないのかと、魚貝夫人は脳裏にかすめる。
　けれども、競い合った以上は勝ちたい。これが女心である。　こうなっては、燃えるような恋をしたいという思いはなかった。たとえ肥満気味の大納言であっても、たとえ相手が蝶々のもの

のけであっても、最高の地位と名声をもっている男なのだから、取り合いをする値打ちがある。だから真剣になっている。それだけのことだ。

第二章・その一

　花丸煌々斎は雨雲が漂い始めた時から、既に池の中に戻っていた。月が陰る前に戻った方が安全である。
　それから、ついでながら酒に酔った勢いもあり、ほろ酔い加減の状態ではあるけれども、池の主である一喝坊のところに立ち寄ってみた。
「いるかな、一喝坊」
「いるかとは失礼な。いつも遊びまわっているお主とは違うぞ。拙者はいつでも、誠実に冷泉地蔵菩薩様に仕えておる。まぁ良い。今日はお主が来たのでは、特別に般若湯でもだそうか」
「この池の中でも、酒を飲んではいけない戒律なのか。お坊様というのは偉いものだ。般若湯というお茶代わりのものでもいただこうか」
「そうするが良い。久し振りだ」
　冷泉地蔵菩薩様を、家族と同様の親密さでもって遇しているから、一緒に飲むために三人分の般若湯を一喝坊は用意した。花丸煌々斎が一気に飲み干すと、一喝坊も同じように飲んだ。きっと、喉が渇いていたのだろう。
　煌々斎は初めて飲んだが、般若湯というのは実に美味であって、日本酒と瓜二つである。常日頃、一喝坊が酒は飲んではいけないとたしなめてはいるが、実は『こんなにも酒にそっくりな飲み物』を飲んでいたのである。
　けれども一喝坊は、すまし顔をしている。明らかに「日本酒とは違うぞ」と言っているような、すました表情だ。煌々斎が言った。
「また、雨が降っているのだ」
「魚貝夫人がやっているのか。何か、気に障るのかな」
「いつもの気まぐれで、やっているのだ」
「馬蹄大納言の気持ちを掴むために、夢中だというではないか」
　そう言いながら、一喝坊は溜息をついた。煌々斎が説明する。
「胡蝶夫人という競争相手が現れたので、むきになっているようだ」
「さもあろうが、相手はあの福々しい大納言だぞ。むきになれるか。本気なのかい」
「はい。私と同じような体躯の持ち主でございます」
「これは失礼した。そなたは精霊だから良い。人間の公卿でも、あの恰幅の良さは、ちと過ぎたる様で見苦しいぞ」
「もっともでございます。拙者は好きでこの体形をしております」
「あの大納言も、好きで豊かな体躯になっていると聞いたが」
「そのようでございますな」
　と言ってから、花丸煌々斎は「あーぁっ」と小さく溜息を漏らした。
　精霊ならば福々しくあっても良く、人間では駄目だという根拠はどこにもない。「それぞれを尊重しあっている」との言葉が、ふと脳裏をかすめた。思えば馬蹄大納言の魅力は肉体ではなくて、そのおおらかな性格である。煌々斎は一喝坊との対話で、改めて気づいた。

　魚貝夫人については、花丸煌々斎は事実を事実として受け止めようと思い、自分で確認する意味もあった。一喝坊は、当然分かっているが、敢えて言った。
「魚貝夫人は美形でございます」
「当たり前だ。此処では妖精と言っているが、本当のところは妖怪だぞ」
「でも、 胡蝶夫人は美形ではありません」
「何と、真にそうなのか」
「けれども馬蹄大納言の心は、胡蝶夫人にもなびいております。それなので魚貝夫人は、必死になっているのでございます」
　一喝坊の気持ちが沈んだ。「もののけのすることではない」という思いがある。
「何と哀れなのだ。この池の中ならば、当代随一の美人なのだ。……美男子で通っている貴殿が、声をかけないからではないのか」
「滅相もありません。だいいち、私には月に仕える使命があります。それに言ってはいけないのですが、私には魚貝夫人のあの目は、どうにも気色が悪いのです」
「そうか。こればかりはなぁ。魚貝夫人の目が嫌いだというのは、人間ならばそなたの顔が嫌いだというのと同じで、どうにもならんな」
　煌々斎は頷いてから気がとがめ、少しおいて、魚貝夫人の名誉のために言った。
「馬蹄大納言が、魚貝夫人の大きな目に一目ぼれをしております。負けずに胡蝶夫人の瞳も、大きくて可愛らしいのです。二人の瞳には格別なものがあるようです。魚の目も昆虫の目も、丸くて黒くて魅力的です。目力というように、あれほどに男心を引きつけるものなのでしょうか」
「いや、馬蹄大納言は、暗示に掛けられているのであろう。両夫人の魅力というよりも、魚の魔力と蝶の魔力に惑わされている。色恋ごとに干渉するのは、男の道から外れる。このまま、そっとしておくのが賢明だ。なるようにしか、ならぬものだ」
　一喝坊の言葉には、人間や精霊の垣根を超える重みがある。寛大なその心が、絶大な信用の礎なのだ。
　花丸煌々斎も口では、魚貝夫人も胡蝶夫人も感心しないと言いながら、実際は二人に対しての恨みも憎しみも皆無である。
　ただ、魚貝夫人が呼ぶことのできる群雲に対しては、月光の照射を妨げる形になるので感心しない。できれば雨雲となる群雲を、呼び込まないでほしい。
　遠くから魚貝夫人の行動を見ていると、馬蹄大納言の積極的で流暢な言葉におぼれるでもなく、結構しっかりとした意見を述べている。まぁ、本体は魚だから溺れることはないけれども、自分の意見は主張する。
　その意見は、大納言の意見に平伏しているのでもなく、妥協しているのでもない。ましてや「空お世辞」などではなく、きちんと言葉を選んで述べている。そこのところを、馬蹄大納言は気に入っている。
　それは、胡蝶夫人も似ていた。魚貝夫人に比べれば、おとなしく謙虚である。普段は林の中にいて、爽快な風と戯れている。そんな優雅な生活をしている。

　馬蹄大納言には随時、御所お抱えの陰陽師が忠告していた。その言葉には、両夫人が耳にすれば、怒ってしまうものが当然にあった。
「妖怪を妖精と表現しても、所詮はもののけに過ぎません。大納言様が楽しく時間を過ごしていらっしゃいますから、我々は傍観しております。もしも、もののけが大納言様に害を及ぼそうとした場合、すぐに我々が対処いたします」
「あい分かった。その時には、よしなに頼む」
　馬蹄大納言もものけに対しては、最後までの絶大なる信用をおいてはいない。それを承知してのふるまいである。人間としては当然だ。
　以前に、魚貝夫人が大納言に言ったことがある。決して告げ口ではなく。
「胡蝶夫人は森の妖精と讃えられるほどの美貌ですが、元々は毛虫だったそうです。卵から幼虫、蛹になって成虫へと変化するなんて、私には信じられませんわ。妖気力とは違って、体内に持っている化身の念力を、どのように若さを維持するために使っているのでしょうか」
「そのことだが、若さを保つ術を一刻も早く、見つけださなければならないのだ。私も歳をとってしまった。不老不死の薬を探そうとしているのは、公家や武士だけではない。また、枯れた仙人になって長生きしても仕方があるまい。私はこの俗世において、楽しむために長生きがしたい。少しでも長くな」
「大納言様の願いを利用して、胡蝶夫人は近づいているのではないでしょうか。大納言様のお力で、思うように宮廷を支配したいのです」
「そんなことはあるまい。もしもそうであっても、可愛らしく、女性らしい望みではないか。胡蝶夫人も不老不死の薬の在り処は知らないようだ」
　魚貝夫人は、胡蝶夫人が宮廷を支配したいと言ったが、本当のところ宮廷を思うがままにしたいのは己自身であった。胡蝶夫人に支配されてはならないという思いから、予防線を張ったのである。
　胡蝶夫人が馬蹄大納言に述べた言葉は、事実であったが、もっと悪意のあるものである。
「大納言様。魚貝夫人は昔、野良猫に襲われたことがあるそうです。連れさらわれて、食べられようとしたのですが、体に油がなくて干からびていたので、食材として認められなかったそうです」
「はっはっは。ひぃー。はっはっは。……それで…何とした」
　面白くて馬蹄大納言は腹を抱え、涙を流しながら聞いている。
「悔しさをばねにして、ようやく本当のもののけの仲間入りを果たしたそうです。魚介類がもののけになるなんて、余程のことがあったと考えておりましたが、野良猫への憎悪は余程のものだったのでしょう。女心は繊細であっても、暴発力は相当なものです。その怒りから、妖気を増大させることができるようになったと、聞き及んでおります。その怒りの力があったから、池の中でも相当な地位を築けたと聞いております」
「大したものだ。努力家だな」

「そう言われればそうですけど。魚の骨がのどに刺さったみたいに心に残り、食べて貰えなかった劣等感から、私を食べてということがあるそうです。魚貝夫人は無意識で言っているので、気がついてはいないようですが」
「そうだ、本当だ。確かに私を食べてということがある。私は冗談で言っているのかと思っていたが、そういう訳だったのか」
　馬蹄大納言は、へんに納得した表情をした。同時に胡蝶夫人は驚いた。
「大納言様にも、私を食べてとおっしゃったのですか。ああ、はしたない。大納言様に…、食べてほしいのは私ですわ」
「分かった。分かった。それくらいにしておけ」
　魚貝夫人への敵対心もあるのか、胡蝶夫人は大納言にすり寄ってくる。すぐに焼き餅をやいたりする純粋さに、これまた大納言は好感をもつ。

　馬蹄大納言は、面白い話を好んで聞いてくる。いつも退屈でしかたがないのと、たとえ作り話であっても、その中に含有されている真実を探しだそうとしているかのようだ。
　わくわくする話に、馬蹄大納言は興味しんしんだ。探求する話の中に、賢明と暗愚、聡明と魯鈍を見いだすことができると考えていた。
　馬蹄大納言については、流石に立派な大納言様と思わせる時も、ままある。反対に余りの頼りなさに、これで大丈夫なのかと心配になる時もある。まことに子供のような天真爛漫さをもつ時もあり、これぞ天才という思考を示す時もある。
　だから胡蝶夫人の話が、誇張された話であることは見抜いている。それでも話を聞くことは楽しいし、その中に隠された真実もみえる。
　聞いていくことの度量を持つことが、大納言としての職責を果たしていく上で重要だ。仕事を果たしていく責任を、いつも背負っていく覚悟はある。

　魚貝夫人には、胡蝶夫人が老獪なお化け蝶々に見えている。胡蝶夫人には、魚貝夫人が老齢の干乾びた魚に見えている。お互いに年を重ねたように感じているのは、昔のことを良く知っているからである。
　何よりも話題は古いし、古い話になれば、お互いに興を得て乗ってくる。二人は此処が似ている。馬蹄大納言にも、これまた良く理解できる話である。
　同世代というのは楽しいが、それが裏目にでて、言わなくてもお互いの年齢が推察できる。昔はこうだったからと言っても、初めの頃は興味をもって聞いている緋鯉姫や緋めだか姫であっても、その光景が実際には目に浮かばない。だから、すぐに飽きる。反対に、両夫人は得意になって語り合っている。
「それも面白かろう」と大納言は思っているのだけれども、以前に話している話を、繰り返されるのはかなわない。姫たちにすれば、退屈なだけである。
　それでも馬蹄大納言には、胡蝶夫人は美貌の天女に見え、魚貝夫人は聡明な淑女に見える。もののけは年齢を重ねても化身できるから、実際の年齢は分からないが、妖精と自覚して振る舞っ

ている二人の夫人に、それは言えない。
　いずれ、緋鯉姫も緋めだか姫も、このようになるのだろうか。それを考える方が、末恐ろしい。
　後になって招月亭には、しとしとと雨が降っている。空を見あげれば、吸い込まれそうな暗闇になっている。それでも馬蹄大納言は宴の余興を続けたかった。
　楽しい余興があって、酒もはずんで飲み放題である。久しぶりなのだ。大勢で楽しもうではないか。
　それにしても、花丸煌々斎の姿が見えない。雨になったので、早々と帰宅したのだろうか。「奴も歳をとったものだ」と脳裏によぎった。

　招月亭の宴を絵にすれば、大納言を中心にして優雅な女御や公卿、雅楽の青年たちが囲んでいる構図になる。その絵画には、音曲さえ描きこまれることだろう。これこそが永遠の命を保ち得る。
　しかし、この絵画は「人間とものけが共存する似せ楽園の図」である。泡沫のあやかしの世界である。これを永遠にとどめ置くことはできない。

　これを放置しておくことはできないと、一人の陰陽師が立ち上がる。

　陰陽師としては修業中であるが、今年二十歳になったばかりで、前途洋々の賀茂水明である。やる気は十分だ。賀茂水明は、天空の北斗七星を眺めていた。
　その時に群雲が起こり、星空が唐突に漆黒の闇に変わった。この変わりようは尋常ではない。自然な天候の変わり具合ではない。明らかに妖気のなせる業である。
　美しく輝く星である、北斗七星の守護神だと教えられて以来、いつも夜空を仰ぎみていた。それが急に覆い隠された。何か不吉なことが起きている。賀茂水明は、陰陽師としての直感で理解した。
　北斗七星の中の、最も輝く星に紫微宮がある。そこには輝かしい天帝が、お暮しになっている。
　地上の星として、地球に天皇がお暮しになっている京都御所の中に、紫微宮殿がある。こちらも神聖な場所だ。だから、賀茂の一門が命をかけて守護している。
　その賀茂一門には、陰陽師としての実力が優れている者がいるために、皇族や公家が庇護を求めてくる。武士であっても、もののけには勝てない。それくらいに悪霊や、もののけの類が身近に存在していた。
　花丸煌々斎が池から姿を現し、馬蹄大納言の宴に訪れていることは、京都御所に仕える陰陽師は誰ひとりとして知らなかった。だから、悪霊退散の必要性を、誰も考えなかった。
　魚貝夫人が池の中から、花丸煌々斎に従う形で出現したのは、元々は魚貝夫人の欲望である。その欲望は、高貴な世界を支配したいというものだが、人間の世界を征服するかのように蹂躙し、支配するのでは混乱が起きる。
　もののけの妖力だけでは、人間の世界を支配できない。それは一時的に覚醒させて、従わせているだけである。
　また、池の中のもののけたちが、怒涛を組んで支配しようとしても駄目である。もののけの世界にも、善悪の判断をする勢力が生まれる。
　魚貝夫人が池の中から現出してくる霊道は、そのまま上に行くと天空界に通じていた。その霊道を下降する形で胡蝶夫人が舞い降りたことは、天に暮らすもののけは皆知っている。
　京都御所のまつりごとは、馬蹄大納言の実力をもってすれば、かなり自由になる。摂政や関白、左大臣や右大臣をはじめとして、馬蹄大納言の言葉には素直に従う。だから、女たちは馬蹄大

納言の愛を一身に受ける者として、宮廷に影響力をもちたいのである。
　女性であれば、豪華な邸宅を造ってほしいと思う。これは、人間もものけも同様である。
　魚貝夫人も、馬蹄大納言家のように、大きな池のある邸宅を望んでいる。胡蝶夫人は、広大な日本庭園、もしくは林の広がる屋敷を望んでいる。その切実な願望を叶えられるのは、馬蹄大納言ただ一人である。
　花丸煌々斎にしてみれば、それだけの望みならば、早く叶えて出ていって欲しい。それが実感だ。何故ならば、魚貝夫人が今の池から出ていってくれるのなら、池が雨雲に覆われることはなくなる。そうなれば、身を潜める必要はなく、自然に降る雨の日を除いては、いつでも自由になれる。それが煌々斎の希望だ。
　一喝坊は池の主として、煩わしい人間界の愚痴を聞くこともなくなる。逢ったことのない胡蝶夫人の悪口を、耳にすることもなくなるだろう。
　そうなれば、常に池の中にいて威厳を保ち、威風堂々たる姿を見せていなくとも良くなる。そして、何よりも好きな時間に外出ができるようになる。
　かねてから、自分よりも妖力の弱いもののけでありながら、煌々斎が自由気ままに池の中と外を行き来する姿を見ていて、羨ましく感じていた。池の主としては家臣がいるために、本心を吐露しなかった。この池の中から、厄介な魚貝夫人がいなくなることを想像すると嬉しく、自然に笑みが浮かんでくる。家臣たちは、従順なもののけだけで良かった。
　少なくとも、この池の中が平穏であれば良いと、一喝坊は心している。
　それ故に、魚貝夫人の恋に関しては、池のみんなが応援していた。魚貝夫人も、その応援を支えに感じいっている。私は池を代表して、馬蹄大納言と結婚しなければならない。その気概と、意気込みにあふれていた。
　同じような闘志を、胡蝶夫人も持っている。馬蹄大納言との結婚が目的だが、こうもはっきりと競争相手がいたことに驚いている。これまで、自分の美貌が最高であると思っていたからだ。
　胡蝶夫人の夫は、どこかに去ってしまった。初めの夫は、黄揚羽蝶であった。二番目は、黒揚羽蝶であったが今はいない。両方とも何処に行ったのか知らない。理由は、胡蝶夫人の美貌に、男たちが悲鳴をあげた結果だと信じている。それくらいに、「自分は神秘的で美しい」と考えている。
　こうした結果でも、胡蝶夫人の脳裏には、勝気さゆえに男たちがまいってしまったという考えは、微塵も浮かばなかった。
　だからこそ、次に自分を幸福にできるのは、人間の世界に君臨する馬蹄大納言の寵愛しかないと考えたのである。胡蝶夫人は、天空からいそいそと舞い降りる。しとやかに、霊界の道を通って降りてくる。
　そこに、熾烈な競争がまっていた。
　二人の夫人には、馬蹄大納言を愛そうとする気持ちの余裕はない。むしろ、馬蹄大納言の愛を独占したい。そのために、猛烈な恋のさや当てが進行した。
　胡蝶夫人と魚貝夫人の出現は、いつの世にも競争相手がいるという自然の法則だった。しかし、そんな人生訓を考えている暇はなく、激しく火花を散らしていた。

もののけ同士の戦いの火花は、陰陽師には、すぐに見つけだすことができる。それは決して人間にとって良い兆しではない。
その鬼火のような、蒼白いもののけの発する火花が、今をときめく馬蹄大納言の身辺に起きている。
びびび
びびび
跳ねるように脈打っている。小さな火花がはね、大きな火花が散っている。

その動きを感じて、もののけの争いを察知している賀茂水明は、いずれは方をつけなければならないという使命感にあふれた。
小さな火花が大きくなり、やがて消すことのできない大火になる前に、対処しなければならない。
それは、いつどのようにやってくるのか。
賀茂水明は、未来を透視する術をもっていない。陰陽師としては、大きな災いをさける術は会得しているし、悪霊を降参させる術も心得ていた。
妖魔退散の術も習得しているから、もののけの化身である魚貝夫人や、胡蝶夫人を追い払う方法は熟知していた。しかし、現在は人間に危害を加えていない。それよりもむしろ、もののけでありながら、馬蹄大納言の役に立ちたいという気持ちで一杯なのである。そのもののけを、悪霊として成敗するべきなのか。
賀茂水明は、そのことでも迷っている。
迷いぬいてから、無二の親友の僧侶である、犀院白影に相談してみようと思った。
犀院白影は陰陽寮に属さない、武士の「斎」をつかさどる仕事をしていた。僧侶であって犀院に住み、通常は白影法師と呼ばれている。早速、連絡してみよう。相談すれば、現在の心細さは晴れるかもしれない。

猫またぎ、という言葉がある。「腐った魚は猫でさえ、またいでいってしまう」喩えである。
猫も食わないという言葉は、「猫が噛んでも味が悪いので吐きだす」という喩えかもしれない。そんな言葉が池の中に流行ったのは、魚貝夫人が油断をして猫に噛まれた事件からである。
その想像は、誰もが推察したとおりであった。
魚貝夫人は怪我をするどころか、噛んだ猫がすぐに離れて逃げていった。噛まれた後は、軽くて傷にならず、赤く残っただけである。それを吹聴して回ったのが、魚貝夫人本人である。
「ねぇ。聴いて。美味しそうな私を噛んだ後に、私だと分かったの。野良猫はすぐに退散したわよ。私の美貌を傷つけてはいけないと、噛んでから考えたのね。私はすり傷ですんだの。奮いつきたくなる気持ちは分かるから、私は許そうと思ったのだけれども、治安のために一喝坊が退治したの。池の中まで野良猫が暴れていたのでは、収拾がつかないそうよ。野良猫の最後の言葉は、美しい魚は食べられなかったと白状したそうよ。でも、かわいそうだったわね」
このように魚貝夫人は、吹聴して回った。勿論、誰ひとりとして信用しなかった。
それどころか話を聞いた人は、猫は魚貝夫人に噛みついたが、まずくて吐きだしたと思った。この女に関わったのが、猫の身の不運である。
その話が広まるにつれ、魚貝夫人は不味いということになった。猫も食わない話だけが独り歩きをしたが、魚貝夫人の耳にだけは入らなかった。
形の上では池の中の、絶世の美女は魚貝夫人になっていた。そう言っておけば平穏で、波風がたたないからであると、全員が解釈し理解もしていた。
それが役にたつ日が来た。魚貝夫人自慢の美貌と上昇志向は、池の中だけでは物足りない。そして毎朝、決まった時間に、池の鯉に餌をやっている馬蹄大納言に恋心を抱くようになった。
人間でありながら上品で、ふくよかな体躯と太く大きな声をもっている。何よりも人間なのに、真っ白い肌と恰幅の良い、ころころの曲線の体が美しい。本当に苦労の知らない、公卿そのものだと思える立ち振る舞いだ。大納言の肌は、魚貝夫人が人間の女性に化身した時のような、雪のような白さに似ている。その時点で、もう恋は盲目だ。絶対に大納言を手に入れようと決心した。
魚貝夫人が、馬蹄大納言に接近するのを反対したのは、花丸煌々斎である。何故ならば、煌々斎は公家の名門である花丸家の当主である。一応、そのような位置づけがなされていた。
花丸煌々斎は藤原一族の正当なる公卿であって、その振る舞いは、誰の目にも馬蹄大納言の親友と映った。特に大納言と同じような趣味を持ち、同じように宴を愛し、同じような面構えと体型である。あらゆる点で馬蹄大納言に似ていたが、公家としての自信と自負については、大納言に引けをとらなかった。
実のところ、花丸煌々斎は馬蹄大納言を手本として、妖力を用いて大納言の容姿を写しとって、人間の姿態をしている。だから、そっくり似ている。
花丸煌々斎が、本当は池に住んでいるもののけだと知れれば、人間によってどのような仕打ちがされるのか分からない。これまでのように胸襟を開いて、大納言をはじめとして、公卿たちは

酒を酌み交わしてくれないだろう。
　魚貝夫人が大納言のお気に入りとなり、いつも脇に仕えているようになってからは、煌々斎は敢えて意識して堂々と振る舞うようになった。
　魚貝夫人は、胡蝶夫人との競い合いに激しい。そのような時に、池のもののけである秘密を、お互いにばらしあう必要はなかった。それはとっくに、お互いが理解していることだ。話し合ったことはないが当然、了解している。だから、それについてはお互いに触れない。むしろ池の出身のもののけが、人間世界に溶け込もうとしているのだから、困った時は助けあおうという心境になる。
　花丸煌々斎は、自分は人間としても美しいと考え、同時に違うかなとも思考する。それでも、やっぱり美しいという結論をだすのだ。それは少し羞恥心を含んだものだが、やっぱり美しいと思うことにした。
　何故なら、池に映る大納言の姿に似ているのだから、これを美しいと言わなかったら、誰を美しいと表現すれば良いのか。今の時代、大納言は宮廷の最高の権力者である。最高に輝いているはずだ。
　馬蹄大納言は、両夫人のあからさまな美の攻撃に対して、己の持っている美意識に基づいて行動している。
　大納言は偉かった。大納言自身が、この世の究極の美を有している自信をもっている。だが、それにしても花丸煌々斎は似ていると思う。それなのに、独自の美を有していない。何故なのだ。時として見せる表情にも、自分は絶対ああいう顔はしないと思う。
　馬蹄大納言は、花丸煌々斎が人間ではないことを薄々感づいている。人間であり同じ藤原一門ならば、絶対にあのような下品な表情はしない。だが、もののけでも良かった。酒の相手をしてくれるのも、白秋の月を一緒に眺めてくれるのも、穏やかな「人柄」ならばそれで良い。間違えた。穏やかな「妖怪柄」であれば、それで良いと思っている。これも同時代の社会に生きている、縁というものだから。これも違う。同時代に意識を持っている「存在」同士として。

　馬蹄大納言は心得ている。もののけであっても、歳月の流れに処して、楽しみながら存在していたい希望があることを。
　それ故に、馬蹄大納言の宴は楽しく、人間ももののけも混じりあっているのである。
　それを知らない両夫人は、本気である。二人は馬蹄大納言に向きあう時は、自分たちがもののけであることは棚に上げている。もののけであればこそ、この世のものではない音楽を口ずさむことができる。妖怪であればこそ、羽化登仙の術を使って、この世のものではない雰囲気作りができる。それを、極楽にいるように楽しんでいるではないか。
　長い間、馬蹄大納言の横に座っていた魚貝夫人は、次に花丸煌々斎の横に座り直した。
「今宵は煌々たる月光の下でお会いできて、まことに、えもいわれぬ風情でございます。さぁ、一献」と言いながら、酒を注いでくれる。
「ありがとう。この安寧が永遠に続くように願っている」
　この言葉は、煌々斎の実感であり、魚貝夫人は感じ入って応じた。
「私たちの喜びを、永続させましょう。これまで私は偏屈でした。孤独でありました。でも、この雅な世界に来られたのも、煌々斎様がおられたからです。何とお礼を申し上げて良いのか分かりません」
「いや私は、この輝く雅な世界を、池の鏡に映したにすぎないのです。池の中の世界が人間の世界よりも美しくて、透明な心で築きあげられているのが、全員に理解されておりません。人間の世界が美しいという幻想で成り立っているだけに、その中に身を置きたいと考えることも重要なのです。あなたが私以上に、この世界で活躍してくれることを望みます」
「ありがとうござ゜います。嬉しゅうございます」
　二人は笑った。
　池の中から選ばれた二人だから、この世の良いも悪いも知りたかった。その時、馬蹄大納言の横に、すかさず胡蝶夫人がすり寄って座った。
「あの人がいますわ」
　魚貝夫人は、顎をしゃくって合図する。
「そのようだな。天空界もまた、複雑な様相を呈している。空にあれば、極楽浄土に近いということでもなさそうだ。それぞれの美の使いが、空から降りてくるのも流行のようだな」
　それは最近、天女が羽衣を失くして困っている話を指している。あっという間に、噂が広がっていた。
「まぁ。煌々斎様。意地悪ね」
「実を言うと、私も飛天には逢ったことがないのだ。羽衣を失くした天女がいると聞くが、私も是非、そのような幸運に巡り合いたいものだ」
「煌々斎様が巡り合いたいのは、そのような幸運ではなくて、天女なのでしょう。そのような悪い考えを持っていては、いつまでたっても天女は姿を現さないでしょう。私をご覧くだされば、それで十分でしょうに。それから胡蝶夫人は、天女とは比較になりません。天女が可哀想ですわ

」
「そうであったな。許せ」
「分かっていただければ結構です。けれども、胡蝶夫人は何が化身したものですか」
「これまた、率直な質問ですな」
「はい。是非に知りたいのです」
　真剣な表情で尋ねる。馬蹄大納言のことを必死に考えているために、胡蝶夫人について知りたいのだ。
　もしも、胡蝶夫人の本当の姿が分かるなら、化けの皮がはがせる。一挙に勝負に出たい。真剣に尋ねられたので、花丸煌々斎は本当のことを言った。
「実は私にも、はっきりとは分からない。しかし、馬蹄大納言様が以前に言ったことがある。胡蝶夫人は黄泉の国の使いである黒揚羽蝶の化身であると、確か、言ったような気がする。その時、幾らなんでも、ただの黄揚羽蝶ではないのかと思ったものだ」
「黒い揚羽蝶なのね」
「ああ、確実ではないが」
　天空から飛来したといっても、鳥の仲間も、蝙蝠の仲間も、昆虫の仲間もいる。だから、おいそれとは言えない。
「黄泉の国の使いなのね。恐ろしい相手だわ」と、小さな声で言い頷いた。魚貝夫人は勝手に、黒揚羽蝶の化身だと断定したようだ。

　煌々斎にしてみれば、池の生き物たちを震えあがらせている魚貝夫人の方が化け物だと考えているから、素直に「うん」とは言えない。
　けれども、魚にしても蝶にしても、人間の女にしても、総じて女性というものは図太い根性がある。魚貝夫人も、胡蝶夫人が手ごわい相手だという確認しただけであって、恐れている気配はない。
　実は、馬蹄大納言は胡蝶夫人が「黄揚羽蝶の化身」であり、元の夫が「黄泉の国の使いの黒揚羽蝶の化身」であり、魚貝夫人は「鮒の化身」であるのを知っていた。花丸煌々斎もまた、池に住むもののけであるが、「月光に映る池の鏡の精霊」であるのを知っていた。
　何故か。
　馬蹄大納言は最近になって特に、緋鯉姫と緋めだか姫と心を通わせている。若い彼女たちは屈託がないから、すぐに話に応じる。また、馬蹄大納言は大きな器量なので、何でも受け入れる。緋鯉姫に尋ねた。
「魚貝夫人は何の化身なのだ」
「鮒です」
「花丸煌々斎は人間なのだろう」
「違います。本当は池の鏡の精霊なのよ」
「ほう。緋鯉姫は何の化身じゃ」
「やだわ。大納言様。……鯉の化身と思っているでしょう。うーん。教えちゃうわ、本当は青龍の化身なの」
「凄いなぁ。最高だな」
「そうなのよ。知らなかったの」
　言いながら緋鯉姫は、凄いでしょうというような感じで微笑んだ。次に大納言は、緋めだか姫に向かって聞いた。
「では、緋めだか姫は何の化身かな」
「何でしょう。大納言様、当ててみて」
「何だろう。何かな。やはり緋鯉姫と同様に、凄いのだろうな」
「えっ、めだかよ。決まっているじゃない。あはは、あはは」
　緋めだか姫は、屈託なく笑った。このように話していて楽しい。もののけと言っても、馬蹄大納言にとっては大切な友人だ。隠し事をしない若い二人といると、大納言は二人の笑顔に魅せられて、過ごす時間がいつも短く感じた。
　そのように時は早く流れ、あっという間に、秋の季節も過ぎていく。
　招月亭における華麗な王朝絵巻も、馬蹄大納言を中心にする華やかな宴も、なかなか見られない世界である。一皮むけば人間の世界に、多種多様なもののけが混在している。この王朝絵巻には、滅多にお目にかかれるものではない。
　それよりも薄汚れている人間の絵巻には、愛憎と嫉妬、怨念も織り込んだ壮麗な王朝絵巻があ

るという。それに比べれば、まだまだ可愛いものだ。招月亭に集まっている者たちが、どれほど優美であることか。恐らく馬蹄大納言は、この虚飾に満ちた「嘘の世界」を楽しんでいるに相違ない。

　それは、虚無を根源にする装飾であり、嘘であっても現実の世界だ。酒や肴があり、歌と踊りもある。歌舞と音曲は、何よりも大納言の好きな世界である。これだけで大納言は満足している。そして、過ぎゆく今宵に酔っている。

　月が輝いている。夜空に星が散り嵌められている。これだけで満足だ。どうかこのまま、時の流れが止まってほしい。馬蹄大納言の脳裏には、そのような考えがいつも過っていた。

一喝坊は静かに、馬蹄大納言を見守っている。
それは同時に、魚貝夫人を見守ることになる。彼女が自分の意思で、外の世界に住みたいというのだから、自由にさせている。そうすることによって、池の中の静寂を確保している効果もある。
このように一喝坊は、智略を用いて池の生き物に対して威厳を示していた。何よりも久しぶりに、池の中に平穏が訪れている。
けれども最近になって、池の世界に波風がたつことが自然と多くなっていった。その原因は一喝坊本人であった。何故なら、一喝坊の行動範囲が急速に拡大したからである。これまでは、池の中央に鎮座していれば良かった。あらゆる情報が入ってきて、その情報に勝るとも劣らぬ忠臣が存在した。そのために安寧は確保されていた。
その安らぎを、一喝坊が揺らがせ始めた。そのおおもとの理由は、馬蹄大納言が新たなる刺激を追い求めたことであった。
馬蹄大納言は毎日の日課として、池の魚に餌付けをしていた。それと同時に、池の世界にまで関心を持ち始めたのである。
一喝坊にしてみれば、青天のへきれきとはこのことである。池の中の静寂は守りたかったのに、馬蹄大納言が「もっと他に、美女はいないのか」と思いついたのだ。考えれば、緋鯉姫も緋めだか姫も池の中に暮らしていた。
大納言とすれば、この池の奥に住んでいる神秘を知りたい。この中に潜んでいる美女と、であいたい。それを考えるだけで、「池の奥には更なる楽しみがあるに相違ない」と思うのが自然だ。それが全ての原因であった。
一喝坊は、これに応えなくてはならない。一喝坊にしてみれば、新たなる難題を押しつけられた格好だ。
こうなってしまっては、相談する相手は花丸煌々斎しかいない。今となっては、大納言と池の世界をつなぐ貴重な存在だ。大納言の友人として、あれこれ振る舞っているのも心強い。
このように考えて、結論をだした。一喝坊自身が池の中を離れて、改めて将来を考えなければならないと。地上の人間世界でも活動しよう。そうすることが、池の中に住んでいる美女たちの、明日の世界を守ることだと信じている。
しかし、一喝坊の池に対する愛着と、池からの出身者に対しての愛情があふれでることによって、悶着が起きた。
次の日の夜、招月亭の宴において馬蹄大納言の前に進み出た一喝坊は、魚貝夫人と花丸煌々斎の紹介もあって、琵琶の演奏を行った。見事であった。
流石に琵琶の音色は、夜空の月に向かってたなびくように響き渡っており、並みいる耳の肥えた公卿たちをはじめとして、集まっている全員の心に染入った。
それもそのはずで、一喝坊の奏でる琵琶は池中の宝物であり、龍神の御所から拝借したものである。池の中で弾けば、波間に真珠の音を飾るという稀代の名器である。馬蹄大納言の心を打た

ないはずはなく、一喝坊はたちまち大納言のお気に入りになった。当然、演奏を終わった一喝坊にお褒めの言葉がかかる。
「見事である。琵琶の音色に惚れて、我を忘れて聞き入った。見事である」
「恐れ入ります。お気に召されれば、私の喜びであります」
「そなたは天下第一の琵琶の名手である。琵琶の名は何と言うのか」
「はい。瑠璃丸と言います。ご覧のように瑠璃の輝きを帯びておりますので」
「たいしたものだ。一喝坊の宝物であろう。大切にいたせよ」
「ありがとうございます。お呼びいただければ、いつでも参ります」
　馬蹄大納言の機嫌はすこぶる良く、満足して星空を眺めている。月に届くかのような音色は、流石に演奏が終了しても、それぞれの心の中に流れている。
「大納言様」
　と、花丸煌々斎が声をかけ、大納言が振り返ると続けて言った。
「実は、一喝坊は流浪の法師でございます。知り合ってから、拙宅に留め置いております。これからも大納言様の下で働きたいとの希望がございます。よろしければ、大納言様の家来に加えていただきたくお願いいたします」
「そうであったか。それであれば苦しゅうない。当面は一人の琵琶法師として仕えることになるが、良いのか」
　大納言の言葉に、煌々斎は振り返った。一喝坊を見ると、「はい」と平伏して答えた。煌々斎は、ゆったりとした口調で大納言に言った。
「是非にお願い申し上げます」
　その様子を魚貝夫人は、満足そうに眺めていた。流石に二人の演技は上手い。見事に一喝坊は、大納言の胸中に飛び込んだ。
　そんなに長い時間がかからないうちに、一喝坊は大納言の腹心となって、権力を掌握していくことだろう。池の中から出身した者たちで御所を征服する野望が、手の届くくらいに間近になっていた。
　そんな思いがしたので、魚貝夫人は胡蝶夫人を見つめた。
　先程のやり取りを眺めながら、胡蝶夫人の瞳に動揺の光が湛えられているのを見逃さない。
　知っている。知っているのだ。一喝坊が最後の手段として、池の中から現出したことを。馬蹄大納言を取り込み、その支配力が御所に向かうことを。

胡蝶夫人は、たった一つの頼みの綱である馬蹄大納言の寵愛を、決して失ってはいけないと考えていた。

一喝坊が花丸煌々斎に連れられて、それはあたかも琵琶の名手を引き連れて、堂々と進んでいく様子をみていても感じられる。

結果として一喝坊は、稀に見る琵琶の名手であった。何よりも胡蝶夫人の心の琴線を揺さぶるような激しさを持ち、同時に淡く儚い音色を奏でることができる。胡蝶夫人も、この音色に心を奪われぬはずはなく陶酔していた。たちどころに、胡蝶夫人は一喝坊の虜になった。

一喝坊の琵琶の音色には、それだけの要素を含んでいた。それだからこそ、一喝坊は池の中でも尊敬されているのだ。性格が良くても、仲間が多くても、聖職者であっても、それだけではない魅了させる力量があった。

突然に胡蝶夫人は、一喝坊しか目に入らなくなった。隣にいるはずの馬蹄大納言の体温を感じないのは不思議である。馬蹄大納言はすっかり一喝坊を気に入り、褒め称えている。近習にするのは間違いない。きっと、お気に入りの臣下になるはずだ。

魚貝夫人は流石に一喝坊と思いながらも、これからはこの人を敵にしてはならないと、しっかり自分自身に言い聞かせた。

緋鯉姫は、一喝坊は池の中でも尊敬されているから当たり前なのだが、この結果に満足しているのだろうかと考えた。それにしても、このように現出してくる野心には感心させられる。年なのに頑張ること。旺盛な探究心があることは凄い。

緋めだか姫は、少し周りの気配を窺ってから、どうしてこんなにつまらない琵琶に感激しているのだろうと思う。招月亭という場所で、月光の下で、つまりは幻想的な環境で演奏したから良く聞こえたけれども、実に退屈であった。いつも池の中で聞いていた演奏と同じだ。ただ、王朝絵巻を音楽にして盛りあげる、雰囲気作りだけは上手かった。

花丸煌々斎は一喝坊を自分で招致したにもかかわらず、人々が感嘆して言葉も出ないなんて、その実力は計り知れないと考えている。その音色は、一喝坊の妖気に重なって響いている訳だが、それにしても凄い。

池の外に連れだして正解だったと、我ながら感心していた。これからは自分の右腕となって働いて貰おう。

宴に参加している公卿も武士たちも、今宵、一喝坊の琵琶を聴くことができて、自分は何と幸運なのかと思っている。また、次の機会があれば、是非に参加したいと考えている。瑠璃丸の魅力に取り込まれたからである。

このように、今夜の招月亭の宴は、一喝坊の独演会になってしまったようだ。幻想的に月の夜が過ぎていくことは、この上もない幸福であり、生きることの無常感を感じられるのは、この上もない贅沢である。貴族は、いつも文学的でなければならない。

本当につまらないことだが、貴族はいつでも昇進や昇格のことを考えたり、妬んだりほくそえんだりしている。仲の良い友人の集まりをもったり、派閥を作ったりしている。そこに群れをな

すという、まことに人間らしい喜びが感じられる。そのようにして、一生を過ごすものだ。
　御所においては、少しくらいの能力の差があっても関係ない。生まれた家の格式によって昇進、昇格も変わり、位の行きつく先が決まっていた。将来の落ち着き先も決まっている。これを矛盾しているとか、つまらないと思わず、一生懸命生きるのも満足した人生の送り方である。
　だが、女は違う。
　天皇が好きになればよい。皇太子が好きになればよい。摂政や関白が好きになればよいのだ。文句があるか。
　たとえ池の中においても、御所においても芳しくない噂のある魚貝夫人であっても、狙いを定めた馬蹄大納言に気に入られれば、恐いものはない。白い脛を見せて、男心をそそれば、それだけの特別待遇が得られる。
　邪魔者は、同じような魂胆をもっている胡蝶夫人だけだ。しかし、見回せば全ての池の勢力が、馬蹄大納言を取り囲んでいる。結果は見えたようなものである。
　一喝坊の琵琶の演奏によって、馬蹄大納言を魅了して虜にしよう。反対に、胡蝶夫人の耳に届く音色は幻聴作用をもたらすもので、気分が悪くなるような演奏をしてもらおう。それぞれの精霊が、聞き分けられる音色は異なるはずだ。だから一定の、限られた音色を奏でることによって、それが可能なことを魚貝夫人は知っていた。
　一喝坊がなるべく早く、胡蝶夫人の嫌いな音色を探しだして、実行することが課題になっている。
「それは容易いことだ」と、一喝坊は言っていながら、すぐに行動をしなかった。そこのところに、魚貝夫人はいら立ちを覚えている昨今だ。
　一喝坊としては、他の者たちによる団結なんて、どうでも良かった。根本的に、魚貝夫人にはぬぐい切れぬ嫌悪感を持っている。
　それに対して、孤軍奮闘している胡蝶夫人のふるまいに好感を持った。新参者の一喝坊に対しても、彼女は優しかった。
　そのために招月亭での演奏は、いつも胡蝶夫人の好みの音楽を主体として演奏した。胡蝶夫人の気分が、悪くなるはずが絶対になかった。その代わりに魚貝夫人対しては、影響のない演奏のはずであるのに、魚貝夫人の苛立ちは誰が見ても分かったのである。それを花丸煌々斎は、冷静に観察していた。

　女同士の勝負において、苛々している女性に気分が移る男性はいない。おおらかに楽しんで、音楽を聴いている女性の姿に惹かれる。それには優雅さが伴う。
　貴賓席において最も大切な要素を、二人の夫人は如実に対局的にあらわしていた。勝負は見えた。誰の目にも明らかである。
　演奏が終了した後で、控室にいる一喝坊に煌々斎は言った。
「一喝坊。やってくれたな」
「分かるかな」
「誰が見ても一目瞭然だ」
「拙者は音楽を楽しんでもらいたいのだ。恋の媚薬に使おうとしても、それは無理な話だな。拙者も許さないが、瑠璃丸も許さないだろう」
「魚貝夫人には、男心を捉えようとしている野心しか存在しないのだ」
「それは立派なことか」
　一喝坊は低く落ち着いた声で、煌々斎に尋ねた。
「池の勢力を拡張しようとしているのだ」
「それも立派なことなのか」
「魚貝夫人には、目的としていることだ」
「煌々斎殿は、どうなのだ」
「私はいつも虚空にいる」
「坊主に似ているな」
　と、一喝坊が言ったので二人は笑った。笑いながら胡蝶夫人も空中からやってきたのだが、もしかすると虚空に遊んでいるのかもしれないと、二人の脳裏に過った。
　胡蝶夫人の態度は、孤軍奮戦している姿ではない。その抱擁力に対しては、馬蹄大納言の気持と共鳴できるほどに、周囲の者の心を和らげさせる。
　胡蝶夫人の排除に躍起になっているのは魚貝夫人のみで、馬蹄大納言の横には胡蝶夫人のような心の持ち主が必要だと考えている者が、多数占めていた。
　いつの間にかというよりも、一目見て一喝坊は胡蝶夫人の存在に惹かれていた。
　一喝坊は思う。この恋が成就して高い地位を得ても、この世界が我のものだと思う気持ちにはなれないものだと。恐らくは、ひっそりと二人で暮らす生活を追い求めるに相違ないと。
　高位に就く女性は、池中からは既に緋鯉姫が現出している。緋鯉姫の本当の姿である「青龍」に化身するならば、それに敵う相手はいない。そのように一喝坊は少し考えてから、更に時が過ぎて、緋めだか姫が本来の力を発揮するなら、緋めだか姫は世界の中心となって生きるだろうと見通した。
　何故ならば、緋めだか姫の本来の姿である「めだか」に固執するならば、それに敵う相手は皆無である。
　緋めだか姫は、数多くの仲間や友人がいる。昼の世界にも夜の世界にも、表の世界にも裏の世

界にも、太いつながりを持つ人脈がある。権力や妖力を持ち、法力を操る友人が至るところにいる。緋めだか姫のためには、一肌脱ぐ輩が仰山いる。
「めだか」になった緋めだか姫には、守護するための力が何処からともなく飛来してくる。この力には誰も敵わない。相手の力が大きければ大きいほど、守護する力は拡大する。
だから、緋鯉姫も一目置いている。もっとも二人は、性格のあった友人であるが。
かねてから一喝坊は、この二人の存在に期待していた。過去と過去の身分にとらわれない、新しい貴族の姫の出現である。何よりも、この世界を住みやすい世界にしようとしている。意味のない身分も解消し、貧困もなくなる新しい世界を創造しようとしている。この二人に賭けてみよう。
そうなれば、魚貝夫人の邪心も消滅するはずだ。そうして僧侶である一喝坊と、天空界の使いである胡蝶夫人との恋にも差しさわりがなくなる。
馬蹄大納言も素直な心で、魚貝夫人を見つめて、新鮮な喜びを感じての恋に陥ることだろう。
一喝坊は瑠璃丸を奏でる時には、必ず上目づかいに緋鯉姫を見ていた。緋鯉姫は、ゆったりとして寛いでいる。青龍の鎧をまとっているので、琵琶の瑠璃丸は緋鯉姫を前にすると、より一層の輝きを増してくる。瑠璃光世界に包まれたような、それは遥か彼方の理想郷であるが、それを現世に創出しているかのように、招月亭が瑠璃色の輝きに包まれる。一喝坊の琵琶の音色に、みんながうっとりと聞き惚れ、夢のように陶酔していた。
ところが、胡蝶夫人は違う。琵琶の音は馬耳東風であり、右の耳から左の耳に流れてしまっている。瑠璃色に輝く琵琶も、奏でる旋律も関係なく、陶酔している公卿たちにも興味はない。胡蝶夫人の目には、瑠璃丸を奏でている一喝坊の姿しか映らなかった。
招月亭の宴は、一喝坊が参加することによって、より上品なものとなった。

　馬蹄大納言の周辺に、もののけが出没している。その頃には御所の中で、当然のように噂になっていた。
　陰陽師である賀茂水明も、招月亭におきている妖魔の集会に気がついている。しかし、人間に対して直接の被害がないために、そのままにしておいた。陰陽師として、妖魔の存在を全否定するのも、酷な話だと考えていたから。
　馬蹄大納言や花丸煌々斎の、もののけを纏めあげる力量も考慮している。最近になって、それは一喝坊が池の中から出てきてからだが、招月亭の中で鬼気迫る葛藤が少なくなっている。
　それは、二人の夫人が馬蹄大納言を巡って、火花を散らす機会が少なくなっているためである。そのために、もののけたちは極めて落ち着いた状態で、日々を過ごしている。結構なことだ。

　遠くから水鏡によって招月亭を観察している賀茂水明は、これなら仕方がない状況だという思いで観察をしていた。もののけたちの葛藤が火花にならなければ、人間にも危害を加えない。それぞれの世界で、それぞれが気分の良いように暮らしている。
　その状態になったのを察知してから、賀茂水明は友人の「武士の斎」を管理している犀院白影に連絡をとった。犀院白影は、「久しぶりに一献、いかがか」という誘いに応じる。応じながらも、何か重要な相談があることを覚悟していた。
　この都に妖魔の支配が感じられる時には、二人は必ず相談して協力する。それが陰陽師と僧侶としての、二人に与えられた宿命だ。運命といっても良い。二人には北斗七星の加護が備わっている。妖魔を打破する宇宙からの力だ。闇を貫く一筋の光のように。
　陰陽師として、賀茂水明の破魔の術が、水鏡を通して招月亭の様子を探っている。同時に僧侶としての犀院白影は、護摩の術により御所を守っている。それは武士のための守護が、しいては貴族のための守護であり、最も大切な御所を守ることになる。
　犀院の本尊は、白犀に乗った釈迦如来であるが、それは秘仏となっている。そのために普段、本尊としているのは虚空蔵菩薩である。しかし、護摩を焚くのは、もう一つの別格本尊の不動明王である。
　このように犀院白影は三尊の御仏がまつられており、釈迦如来がおでましになる時には、二尊は脇侍仏となる。しかし何故、通常の釈迦三尊である釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩になっていないのか。
　理由は犀院が妖魔退散と悪霊鎮護の寺であるから、不動明王の正義の憤怒と虚空蔵菩薩の包みこむ大きな器量、白犀の気高さと釈迦如来の静謐が、どんな妖怪さえも委縮させてしまうためであった。
　この御仏に仕える犀院白影は、北斗七星の輝きを有していた。仏法もまた、都を厚く守護していたのである。
　それは京都において、いかに多くの悪霊が闊歩しているのかの証明となってしまうのだが、歴史と伝統のある古都には仕方のないものだ。

　賀茂水明が言う。
「どうしたものだろう。白影法師には見えるか」
「妖怪の姿は感じられる。……集まってはいるが、しかし、騒いではいない」
「悪霊退散が必要だろうか」
「犀院としては守護の読経をするが、今のところ招月亭への攻撃は必要ないだろう」
「そう思うか」
「招月亭から追い払っても、招月亭の池にもののけがいるのだから、そこに逃げ込むだけになる」
「馬蹄大納言はどうするだろう。人間という触れ込みになっているが」
「そのままにしておいて、御所に来たところをお主が本性を解き明かしてやれ」
「それが良いのか」
「本人が人間と思っているのだ。周りもだが。馬蹄大納言の意識を元に戻さねばならない。陰陽師としての、お主に最適の役割ではないか」
「確かに」　と、納得した。
　賀茂水明は彼のためにも、人間としての呪縛を解いてやるのが賢明だろうと考えた。
　既に、本格的な秋になっている。秋とはいっても、肌寒く感じる日もある。池に初冬の風が吹き込まないうちに、馬蹄大納言の意識の改革が必要だ。
　賀茂水明は、犀院白影の言葉どおりに試してみようと考えている。
　馬蹄大納言の、人間としての活躍は終焉を迎えても良いくらいだ。もののけ故に、人間以上の功績を御所に残したけれども、妖気力が膨らみ過ぎないうちに引導を渡すのが、陰陽師としての役割だ。そのために自分が存在していると考えると、賀茂水明は緊張感もあり自然に拳を握りしめた。
　では、馬蹄大納言の正体は何か。
　これまで、ずっと人間として信用してきただけに、正体の想像がつかない。御所においても尊敬していたために、正体なぞ考えたこともない。流石に、犀院白影法師は見抜いていたけれども。
　どうして、賀茂水明が見破れなかったのか。

　犀院白影はこれまでに、冗談で言っていた。
「仏法に仕える身が清らかなのだ。心も体も透明にあるからだ。陰陽師のもつ術とは違うぞ」
「失敬な。仏法をとやかく言わないが、陰陽師は異なる世界を守護するのだ」
「異なる世界とは」
「宇宙に決まっているではないか」
　賀茂水明の答えを聞いて、白影はそうなのかと思い、それ以上は言わなかった。当初は異次元世界を、守護していると答えるものと考えていた。宇宙ときたか。それでは、仏法もまた三千世界の宇宙を守護しているのだ、というべきところを言わない。その代わりに言った。
「馬蹄大納言は、花丸煌々斎の妖力によって守られているはずだ」
「そうだと考えていた」
「あの二人が双子のようにそっくりなのは、花丸煌々斎が馬蹄大納言の写しとして似せているからだが、それだけではない。お主のような天下第一の陰陽師でさえ、見破れないのだ。それには理由がある。賀茂家伝来の水鏡では、馬蹄大納言も花丸煌々斎の姿も映さない。いや、彼らの姿は、古今東西のありとあらゆる水鏡には映らないのだ。それ故に、もののけだと見破れない。水鏡に映らないから人間だと判断する。ここが違う。花丸煌々斎はもののけであるが、人間に害をなさない。その正体は池が月光に照らされ、池の表面が鏡になった時の妖精である。彼こそは、池の水鏡の精霊なのだ。都合の悪い時には、池の中に潜る。これでは捕まらないし、退治の必要もない。先程は、煌々斎が大納言に似せていると言ったが、実は逆なのだ。煌々斎は大納言の姿に真似て、御所の中でさえ、好き勝手にしていると思わせている。しかし、本当は大納言が煌々斎と同じ容姿をすることにより、北斗七星の守護がある我らから身を隠していたのだ。決してもののけと、悟られないようにな。我らの力は、それほどに妖怪には恐れられているのだ。凄いだろう」
　白影は、最後には冗談を含ませて言ったのに、賀茂水明は真剣に受け止める。
「そうだったのか。水鏡に映らないために、油断をしていた。それにしても、馬蹄大納言も、もののけなのだ」
　本当の事実を知って、賀茂水明は暗い気分になる。
　そうであれば、馬蹄大納言は何の化身か。退治する時のために、本来の姿を知っていたい。正体は何か。そう考えてから、花丸煌々斎が池の鏡の精というならば、そこらあたりに、参考となる何かが隠されているだろう。それにしても、犀院白影の洞察力には感心した。
　実のところは、犀院白影の別格本尊である不動明王のお力によるところが大きいことを、まだ賀茂水明は知っていない。悪霊や怨霊には恐い存在である不動明王の加護ゆえに、白影は馬蹄大納言の存在を怪しいと感じたのである。
　続いて、馬蹄大納言と花丸煌々斎が、人間として御所にまで立ち入っているのを芳しくないとしたのは、同じく犀院白影の本尊である虚空蔵菩薩である。その懐の大きな虚空蔵においてすら、もののけや妖怪とされているものが、人間世界に介入しているのは、必ずしも異次元の交流に

は適しないと判断した。
　それらが存在する世界は、能力によって拡大していくとされてはいる。しかし、結界の中では自己実現のための努力は認められるべきであるが、もののけが化身によって御所に入る必要はない。それは、もののけが野心と憧憬によって加わっているにすぎないのだから、心の問題としてはあまりに凄惨である。
　月夜に招月亭に集合して、友と思うままに語り、好きなだけ酒を飲んで騒いでも良い。一喝坊の妙なる琵琶の音色に、聞き惚れているのも良い。その折りに、馬蹄大納言と花丸煌々斎として振る舞うのも良い。
　人間としての容姿に包まれていたいのであれば、そうすれば良い。二人の夫人も二人の姫も、楽しんでそうしているではないか。
　まぁ、二人の姫は化身することによって、化身自体を楽しんでいるから良いのだが、本来なら二人とも将来は青龍と白龍になって、竜宮城に君臨する運命だ。
　もののけや妖怪と言っても、悪霊や怨霊の類ではなく、かと言って妖精と表現しても相応しくないような、特別な存在がある。その最たるものが、馬蹄大納言である。妖精ゆえに、人間にももののけにも好かれて尊敬を集めている。話術も上手い。その状況を、ここまで遊べば良いではないかと判断したのは、犀院白影が本尊として仕えている、白犀に乗った釈迦如来である。
　馬蹄大納言は、蘭草の妖精である。
　蘭草は普通、藤袴と呼称されている秋の花であり、香りが美しいことから、香水蘭と言われる。招月亭のあらゆるところに群生している蘭草は、招月亭を代表する草花である。無論、池の周囲にも群生していた。
　その中の一輪の蘭草が、馬蹄大納言となって楽しんでいたのだ。初めは、池の鏡に写しだされる蘭草の容姿を、花丸煌々斎が真似た。煌々斎が池の鏡に映しだされているのを見て、蘭草の妖精である馬蹄大納言は写しとったのである。それは、二人の妖精の思いが形となったものであり、相互に思いが写しとられたものであるから、似ているのも道理だった。
　だから、仏法に仕える犀院白影には、全てを洞察することができたのである。
　月光に照らされた招月亭の上空には、遠く明るく北斗七星が存在する。全てが光り輝く世界に躊躇はない。
　この時、犀院白影は、陰陽師の賀茂水明に伝達する。言葉では届かず、頭脳から頭脳への意思伝達を試みる。それは核心を映像で伝えるため、賀茂水明の心の琴線にも触れた。
「そうであったか」
　賀茂水明は、素直な心で感心した。
　それらのことを踏まえて、独り言を呟いた。
「やはり、もののけを退治するかどうかの判断をするのに、犀院白影法師に相談して良かった。もののけが、これ以上の戯れをしないようにしなければなるまい」
　犀院白影から、次なる映像が送り届けられる。新たなる蝶の化身だ。

化身とは全く異なる姿となって、幸福を追求していく姿である。これには賀茂水明も驚いたが、この意表を突く結論に文句はなかった。
それは翌年の春浅い日に、蘭草に戻った馬蹄大納言と戯れている、紋白蝶となった魚貝夫人の姿であった。
それから次に浮かぶものがある。
同じく翌年の春の暖かな日に、池の中で戯れる二匹の赤い鮒、つまり金魚の姿である。赤い鮒に化身した一喝坊と、赤い鮒に化身することを希望した胡蝶夫人である。池は小川に続いている。二匹の金魚は、その小川のせせらぎを楽しみながら泳いでいる。
皮肉なことに、黄揚羽蝶を目の敵にしていた魚貝夫人は紋白蝶になり、魚の妖怪と馬鹿にしていた胡蝶夫人は、赤い鮒に変貌したのである。女性は恋をすると変わるというけれども、この結果からすると二人の夫人は、これまでの恋敵の良い部分も承知していたのかもしれない。
その次に浮かぶのは、蘭草になれない花丸煌々斎の姿である。相変わらず、池の鏡の精霊として月光を傍受している。
気が向けば人間の姿になって、御所にも遊ぶ。手にしているのは、琵琶の瑠璃丸である。一喝坊と仲が良かったので、貰ったのである。きらきらと輝く金魚となった一喝坊には、瑠璃丸は不用であった。花丸煌々斎は月影の中で、琵琶を楽しそうに奏でている。

犀院白影法師からの、それらの映像を受け止め、賀茂水明は直ちに行動を起こした。それは、最良の結果から推し測って、こうするのが最善であるという、強い気持ちになっていた。犀院白影からの伝えは、こうあらなければならないという方針と、こうあれば、もののけの心に安寧をもたらすことが出来るというものであったから。
行動に迷いはない。当代一流の陰陽師が動くのだ。馬蹄大納言も魚貝夫人も、一喝坊も胡蝶夫人も、花丸煌々斎も動揺した。
特に、魚貝夫人は軽蔑していた蝶になるのかと思い、胡蝶夫人は嫌がっていた魚になるのだと決心している。その意義が、好きな男性と一緒になれるということで、悲しみの向こうに幸福があるのだと考えて、二人の夫人は奇妙な一致を見た。二人はともに自分を悲劇の主人公だと思い、愛する人のためには何もかも捨てて、飛び込んでいく純粋さに自己陶酔している。
一喝坊もまた、思考している。本来は池の主である。池を代表して御所に入っているのだ。天空界から来た胡蝶夫人に魅了され、我を忘れていた。それでも池の主としての自負は残っている。それらをすべて、捨てなければならない。
しかし、捨てることによって新しい生活が始まり、その生活が赤い鮒の胡蝶夫人と自分であるならば、池を泳ぎ小川を泳いで大海にでる楽しみがある。一喝坊は、これもまた一興と考えた。流石に池の主としての器量がある。
そのためにそれぞれが、一時的には賀茂水明からの逃避を図ったけれども、結果として「賀茂水明の落とし所」が理解できるために、積極的に協力したとは言えないまでも、反抗しないで従

ったのである。
　当代一流の陰陽師と僧侶である、賀茂水明と犀院白影の両者によって引導を渡されたのだから、もののけとしては従わざるを得ない。二人のもつ北斗七星の守護は、もののけに対しても安らぎを感じられるものであった。これが宇宙の星、天空の住む北斗七星の加護かもしれない。

　それらの推移を、黙って見守っていたのが二人の姫である。
　緋鯉姫は言う。
「これまで十分楽しんだから、いいじゃないの」
　緋めだか姫も言った。
「馬蹄大納言が蘭草の妖精だったなんて。人間だって、自分で言うから信じてあげたけれど、おかしいと思っていたのよ」
「でも、蘭草の妖精だけあって、良い香りがしていたじゃない。蘭草は別名、香水蘭とも言うのよ。魚貝夫人が紋白蝶になっても良いから、結婚したいというのは何となく分かるわ」
　緋めだか姫が、笑いながら答える。
「そうよねぇ。胡蝶夫人が妬いたって、どうにもならないじゃない」
　馬蹄大納言が蘭草の化身であったから、胡蝶夫人は近づきやすかっただけなのだ。何てことはない。花が蝶々を魅了するという親近感が、そうさせたのである。
　緋鯉姫が、仕方がないわねぇという意味の溜息をついてから言った。
「でも、胡蝶夫人も化身して、相思相愛の一喝坊と一緒になったのでしょう。二人とも金魚になって小川で泳いでいるなんて、考えれば贅沢よね。人間は化身できないのよ。もののけは便利でしょう。花丸煌々斎様は元のままだけれど……でも琵琶の瑠璃丸を手に入れたわ。あれは本来、私たちのものなのよ」
「それでも一件、落着したわ」
　と、緋めだか姫は言ってから、更に言葉を続けた。
「さぁ、私たちも池に戻りましょう。緋鯉姫ももうすぐ青龍になって、私も遅ればせながら白龍にならなければならない運命でしょう。これからは、煌々斎様が瑠璃丸を奏でてくれるでしょうから、その時は聞きに行きましょうね」
緋鯉姫が、「そうね。」と答える。
　琵琶の瑠璃丸は、青龍の鱗でできている。うるわしい音楽を奏でないはずはない。緋めだか姫はそれを知っているのだろうかと思ったが、緋鯉姫はどちらでも良いと思い返した。
　緋めだか姫が大人になって、教養を積み、海神としての白龍になるまでには相当な時間がかかるだろう。それまでの数年という間は、緋鯉姫は青龍の役目である「竜宮城の乙姫様」の責務を果たさなければならなかった。
　それを考えると気が重くなるが、竜宮城での時間はとても速く過ぎるから、緋めだか姫の成長を眺めるのも楽しみだ。白龍となって竜宮城にくる頃には、私は責任を果たし終え、隠居して楽しく暮らしていることだろう。絵にも描けない美しい竜宮城で。
　緋鯉姫は少し首を傾げ、遠くを見つめるような眼差しをする。それは将来を見つめていたので

あるが、夕焼け雲を眺めているかのようでもあった。

亀を助けた青年が、竜宮城にやってきて暮らすのは、それから十年後のことである。

（了）

招月亭の宴

http://p.booklog.jp/book/55011

著者：赤堀芳男
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/nishinogawa/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/55011

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/55011

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ